大学生の高齢者イメージと親への介護観

福嶋　あつき

【本研究の背景・目的・仮説】

介護の社会化や高齢者が増加する中、若年層が抱く介護観は将来の介護の在り方を左右する要素であると予測さる。また、介護観をイメージ・認知・感情の 3 側面から別々に検討した研究は見受けられず、どの要素が大きく影響しているのかが曖昧である。そこで本研究では、1）大学生の高齢イメージだけではなく，認知的・感情的な側面を含むエイジズムを交えた介護観との関連を検討し，イメージ・認知・感情の 3 つの要因の重みづけを行うこと、2）男女の高齢者イメージ，エイジズム，介護観を比較すること、の 2 点を目的とした。また、1）認知的・感情的側面を含むエイジズムよりも，高齢者イメージの方が，介護観に影響を及ぼすこと、2）高齢者イメージ及びエイジズムが，男性よりも女性の方が低く，「家族介護意識」や「肯定的な介護意識」も女性の方が高くなること、の 2 点を仮説として検討した。

【方法】

関西の大学生 108 名を対象とし，質問紙調査を行った。質問紙の内容は，フェイスシート，日本語版 fraboni エイジズム尺度（FSA）短縮版（原田・杉原ら，2004），高齢者イメージ（松尾・谷口ら，2006），介護観評価尺度（藤若・進藤ら，2010）であった。

【結果・考察】

相関分析の結果より，高齢者イメージ・認知的エイジズム・感情的エイジズムはそれぞれ別の概念であることが示唆された。

仮説 1）について、回帰分析の結果，「肯定的な介護意識」では仮説は支持されず，イメージ・認知・感情の 3 つの側面が同程度に弱く影響し，親との関係満足度の方が強く影響していること，「介護に対する保守意識」では仮説が支持され，イメージが認知・感情的側面よりも影響度が高いことが示唆された。ただし，「肯定的な介護意識」及び「介護に対する保守意識」ともに，重決定係数が低かったことから，イメージ・認知・感情・親との関係とは別の要因が，大学生の介護観に大きく影響していると推察された。また，「家族介護意識」及び「社会的介護意識」では仮説が支持されず，イメージ・認知・感情のどの側面からも影響を受けていなかった。ただし，老後や介護について話した経験があると，「社会的介護意識」は低くなることが示された。以上より，介護観全体への高齢者イメージ・認知的エイジズム・感情的エイジズムの 3 要素の影響度は小さいものであり，親や祖父母との関係性や老後に関する話し合いが与える影響度の方が大きく，他の要因が介護観に影響を与えている可能性が示唆された。また，高齢者全体に対する認識より，他の世代との関係性や個人的な考えの方が，介護観に影響を与えている可能性が考えられた。

仮説 2）については，高齢者イメージやエイジズムのうち，幸福性（イメージ），嫌悪・差別（認知的エイジズム）と回避（感情的エイジズム）の合計 3 因子において有意な性差が確認された。このことから，女性に比べて男性は幸福性（イメージ）を低く評価し，嫌悪・差別（認知的エイジズム）と回避（感情的エイジズム）の傾向が強いことが示され，仮説は支持された。ただし，介護観には性差は見られず，本研究では用いなかった別の要因が現代の介護負担の性差に影響を及ぼしていくことが示唆された。（臨床死生学・老年行動学）